

# 宋詩にみえる「枕中記」の影響について

岡 本 不 二 明

富士の雪 盧生が夢を <sup>つか</sup>築せたり 芭蕉「六百番発句合」

はじめに

詩賦などの古代から正統的な文学ジャンルが、典故として小説を取り込む例は、経書や正史などに比べて圧倒的に少なかった。それは小説が「街談巷語」「道聽塗説」に発した価値の低い語り物の記録とみなされていたからである。唐詩の典故でいえば、六朝の小説類は『世説新語』を例外として、『搜神記』『列仙伝』『博物志』などの神仙に関連する話柄が圧倒的に多い。

しかし宋代に入ると、詩風の日常化、表現の平易化、典故の多様化などの変化にともない、小説の内容や主題を詩に取り込むケースは次第に拡大し、唐代伝奇でいえば「李娃伝」「鶯鶯伝」「崔徽伝」「無双伝」「袁氏伝」「人面桃花」「紅葉題詩」など恋愛物語的な作品群から、「枕中記」「南柯太守伝」「秦夢記」「桜桃青衣」など一連の官人出世の夢物語まで、多くの小説が取り込まれるようになる。中でも後者に属する二つの伝奇小説、すなわち沈既済「枕中記」と李公佐「南柯太守伝」は、人生のはかなさ、官界での出世、栄華と凋落など、すぐれた哲学的なテーマを提示し、意表を突いた発想や構成をもったが、その点で人生を語り議論を好んだ宋代士大夫の関心を引いた。

以下、本稿では北宋から南宋にかけて、この二つの小説の中、まず「枕中記」を取り上げ、それが詩人たちにどのように受容されていったのかを考察する。「南柯太守伝」に関しては、紙幅の都合で続稿に回す。なお膨大な量の宋詩をすべて調べあげることは不可能に近いので、あくまで主要な詩人にしぼり議論をすすめることにする。

## 第一章 宋詩と「枕中記」

「枕中記」の制作は、作者沈既済が徳宗の建中二年（782）冬、処州司戸参軍に左遷されてから二、三年以内と推定されている。『唐国史補』巻下は、「枕中記」を「莊生寓言之類」と述べ、韓愈「毛穎伝」とともに「二篇眞良史之才也」と褒め称えた。また房千里（大和初の進士）の「骰子選格序」（『全唐文』巻760）は「近者沈拾遺述枕中事云々」と、「枕中記」を官界出世双六にみたてた。そして中唐から晩唐にかけ徐々に流布していった「枕中記」は、晩唐に編纂された伝奇名作集の陳翰『異聞集』に収められたことで、宋代に入ると一気に広まったものと想像される。

北宋前期には『文苑英華』巻833に「枕中記」と題して、『太平広記』巻82には「呂翁」と題して、それぞれ収録された。ただし一般的な宋代士人は、流通の少ない『文苑英華』や『太平広記』によって「枕中記」に接したとは考えにくく、蘇軾・黄庭堅・陳師道などの詩集の宋人注からみて、大部分は単行していた『異聞集』により「枕中記」を知ったものと思われる。

王応麟『困学紀聞』巻10や洪邁『容齋四筆』巻1は、『莊子』や『列子』に連なる寓話的な小説として「枕中記」「南柯太守伝」「桜桃青衣」を挙げている。さらに北宋後期の小説集『青瑣高議』前集巻2は、「枕中記」をそっくり裏返したような小説「慈雲記」を収めており、「枕中記」の浸透ぶりを窺わせる。

唐代で「枕中記」を踏まえた詩は今のところ見当たらないが、北宋に入ると、王安石・蘇軾・黄庭堅・陳師道・陳与義・張耒などの詩に「枕中記」を典故として使っている例がみられる。具体的には、「夢」「枕」「邯鄲」「黄梁」「黍」「一炊」「未熟」などの語彙の組み合わせで「枕中記」を示唆する場合が多い。また「枕中記」が夢を主題としているから、当然ながらそれを取り入れた宋詩も、夢や睡眠や枕などにまつわるものが多い。また舞台となった邯鄲にこと寄せた詩もみられる。

ただし邯鄲という言葉に関しては、戦国時代の趙の都として、繁華で妓楼が連なる花街のイメージが先行してきたことに注意する必要がある。唐代で言えば、たとえば高適「邯鄲少年行」（『全唐詩』巻24）の「邯鄲の城南 遊侠の子、自ら<sup>ほこ</sup>矜る 邯鄲の<sup>なか</sup>裏に生長するを」、李白「俠客行」（同上巻25）の「趙を救うに金槌を揮い、邯鄲 先ず震驚す」などは、粋な侠客の若者が活躍する都会として邯鄲が詠われている。

また儲光羲「同王十三維偶然作」（同上巻137）の「妾は本と邯鄲の人、生長し叢台に在り」、戎昱「相和歌辞」（同上巻19）の「帰来す 邯鄲の市、百尺 青楼の梯」、崔顥「邯鄲宮人怨」（同上巻130）の「邯鄲陌上 三月の春、暮に行き逢い見る 一婦人」などは、青楼が軒を連ねる邯鄲の街で、悲運にもてあそばれた妓女たちを取り上げている。

むしろ「枕中記」は、邯鄲の旅籠で貧乏な若者盧生が夢をみる話であって、邯鄲の街そのものの描写はまったくない。それゆえ古くからの邯鄲の語の曳航するイメージは、直接には関係しないが、貧乏な主人公が自分の将来を悲観する姿は、こうした華やかな邯鄲の語のもつ都会的なイメージが背景にあってこそ、一層際立ったに違いあるまい。

## 第二章 王安石

北宋の前期で「枕中記」を詩の典故として使う用例はほとんどない。まとまった用例が出るのは北宋も後半になってからである。その中では王安石の5例が目を引く。以下、順次検討してみる。テキストは李之亮校点『王荊公詩注補箋』巴蜀書社、2002年、詩題の前の数字は巻数を示す（以下同じ）。

2 游土山示蔡天啓秘校

邯鄲枕上事

邯鄲 枕上の事

且飲且田獵            且<sup>しば</sup>し飲み   且<sup>しば</sup>し田獵す

邯鄲の楽しい夢も一瞬のことで、飲酒する楽しい夢をみたかと思えば、朝にはすっかり忘れて狩猟に出たりする、という意で、人間の愚かさを示唆していよう。後句は『莊子』齊物論篇の「夢に酒を飲む者は、且に哭泣す。夢に哭泣する者は、且に田獵す」を踏まえるが、ややずれた引用になる<sup>1)</sup>。なお王安石には「莊周論」の一文があり、思想的には仏教とともに『莊子』に対して並々ならぬ関心を抱いていた。

41夢

黄梁欲熟且留連            黄梁熟せんと欲し   且し留連す  
 漫道春歸莫悵然            漫に春の帰るを道い   悵然とする莫れ  
 蝴蝶豈能知夢事            蝴蝶   豈に能く夢事を知らん  
 蘧蘧飛墮晚花前            蘧蘧として   飛びて晩花の前に墮つ

七絶の前半は、黄梁が蒸しあがり夢から覚めようとするが、しばしこのままでいたい。春が終わってしまうと、とりとめもなく嘆いてみてもはじまらない、という大意で、季節の移ろいという現実もまた夢の世界だと説く。「黄梁欲熟」は夢からの目覚めを指すのみで、それ以上でもそれ以下でもない。後半二句は言うまでもなく『莊子』齊物論篇のいわゆる「蝴蝶の夢」を踏まえ、「蘧蘧」の語もそこに「俄然覺則蘧蘧然周也」とみえる。王応麟『困学紀聞』巻10莊子齊物論郭象注の条が「邯鄲枕・南柯守の説、皆此の意に原づく」と述べるように、『莊子』の「蝴蝶の夢」は「枕中記」や「南柯太守伝」などの夢物語の先蹤として、早くから指摘されていた。

南宋の趙彦衛『雲麓漫鈔』巻14によれば、王安石は昼寝に方枕（箱型の枕）を愛用したが、人にその理由を聞かれ「眠っているうちに枕が頭の熱で暑くなると、枕を回転させて別の面をあてることができるから」と答えたという。如何にも合理主義者らしい逸話で、趙彦衛は「真に睡りを知る者か」と感心している。

42与耿天隲會話

邯鄲四十餘年夢            邯鄲四十余年の夢  
 相對黄梁欲熟時            相對す   黄梁熟せんと欲する時

耿天隲（名は憲）とはすでに四十余年の夢のようなつきあいだが、今こうして会えるとは夢から覚め黄梁が蒸しあがる時のようだ、と述べる。この場合の「邯鄲夢」は、耿天隲との長い付き合いを懐かしみ、肯定的な意味をあたえようとしている。

43示宝覺其二

客舍黄梁今始熟            客舍   黄梁   今始めて熟す  
 鳥殘红柿昔曾分            鳥は红柿を残す   昔曾の分

宝覚和尚とともに過ごした一夜も明けんとし、鳥が红柿を食べ残すようにあなたと食事を分かち合いましょう、という意である。後句は『苕溪漁隱叢話』前集巻36が指摘するように『景德伝灯録』の瀉山と仰山の対話に基づく。黄と紅の色彩対比を意識した句作りになっている。この詩の「黄梁今始熟」は夢の覚醒の言い換えであるが、宝覚との一夜の語らいを考慮すれば、やはり肯定的なニュアンスを帯びていよう。

43万事

萬事黄梁欲熟時      万事 黄梁 熟せんと欲する時  
 世間談笑漫追隨      世間 談笑 漫に追隨す

どんな事でも夢のように終わるのに、俗世は談笑にふけりみだりに追隨している、と達観する。詩のテーマが抽象的であるが、夢の終わりという意味を伝えるためだけに、「枕中記」を踏まえている。なお李壁の注は「公詩屢用黄梁事、而語意皆妙」と言う。

45懐鍾山

何須更待黄梁熟      何ぞ<sup>もちい</sup>須んや 更に黄梁の熟するを待つを  
 始覺人間是夢間      始めて覚ゆ 人間は是れ夢間と

夢が終わるのを待つ必要などない、この現実世界もまた夢だと分かったからだ、と看破する。ここでも「黄梁熟」の語は、「夢の終わり」の言い換えである。

「枕中記」では、盧生の夢の時間の短さを強調して、「主人蒸黍未熟」（文苑英華本）「主人蒸黄梁尚未熟」（太平広記本）と表現していた。八十年の栄華で飾られた人生を夢でみた時間は、現実には数十分もかからない「黍（ないし黄梁）未熟」の間であったと、時間の短さを強調していた。しかし上記のように王安石の特徴は、6例ともすべて「黄梁」の語を使い、かつ「黄梁欲熟」「黄梁今始熟」「黄梁熟」と、ことごとく「未熟」の語を避けていることだ。黄梁や黍を炊きあげるに、分量にもよるが、いくらなんでも数時間はかからないから、王安石の言い方でも（人生の長さに比べ）夢の短さを暗示することにはなるが、いささか不自然さも免れないように感じられる。

この「未熟」の語をことさらに避けたような表現をとったのは、おそらく王安石の詩的な体質に根ざしたものであろう。たとえば、梁の王籍「入若耶溪」の「鳥鳴き山は更に幽なり」を、王安石が「鍾山即事」で「一鳥鳴かずして山更に幽なり」とひとひねりし、議論を呼んだことはよく知られる。清水茂氏はこれを評して、王籍の鋭い感覚に対し、王安石の改変が「ひねった妙味はあっても、詩の内容としては、常識的」である、とされたが<sup>[2]</sup>、「枕中記」の典故としての取り入れ方も、それとどこか共通したものがある。

また王安石の「枕中記」の取り込み方は、この小説の主題や思想とは深く関わっておらず、強いて言えば「甘美な夢」「はかない夢」といった一般的なニュアンスで使われているのみである。その意味では、表面的な技巧に終わっているとも言えよう。上記の引用した詩が、「游土山示蔡天啓秘校」を除けば、すべて絶句という短詩型であることも、典故として軽い用い方という印象をあたえている。

### 第三章 黄庭堅

王安石の詩学の実質的な後継者と目されるのが、黄庭堅である。黄庭堅の詩の特徴は、早く清の趙翼『甌北詩話』巻11が指摘したように<sup>[3]</sup>、一字として来歴のないものはないと言われるほど典故を多用する点にあった。莫礪鋒によれば<sup>[4]</sup>、黄庭堅のテキストの『内集』で宋人の任淵

が注として挙げた書物は四百種以上にのぼり、その範囲は経、史、子、集から仏典や稗官小説まで幅広く、特に難解な仏典の語を好んで使ったため、仏学に通じない者にはまったく意味が分からなかったという。その一方で、気に入った典故は繰り返し使い、なかでも『莊子』徐無鬼篇の「匠石運斤」は計19例、唐代伝奇小説「枕中記」は計13例にもわたると述べる。

莫氏の言う13例は、おそらく任淵の注に基づくものであろうが、必ずしも明確には典故といえないものもある。以下、劉尚榮校点『黃庭堅詩集注』中華書局、2003年により見ていこう。

内集1 王稚川既得官云々其二

従師學道魚千里      師に従い 道を学ぶ 魚千里  
蓋世成功黍一炊      蓋世の成功 黍一炊

王稚川（名は砒）が都で得官した後も帰って来ないため、黃庭堅が「師に従い勉強するのは魚が千里も泳ぎ回る辛さ、そんなにして手柄を立てても一瞬のことさ」とからかい気味に述べる。

内集1 次韻公叔舅

昨夢黃粱半熟      昨夢 黃粱は半ば熟す  
立談白璧一雙      立談して 白璧 一雙

昨日みた夢は忽ちに消え、立ち話の間に揃いの白い璧玉を手に入れると、ここでも栄華の消滅と、逆にあつという間に押し上げられる富貴という、この世の急激な盛衰ぶりを強調する。

内集3 次韻子瞻贈王定国

百年炊未熟      百年 炊きて未だ熟せず  
一垤蟻追奔      一垤 蟻は追奔す

王定国（名は鞏）の原韻に蘇軾が次韻し、さらに黃庭堅がそれに次韻して王氏に送った詩である。高名にいつまでも見合う事は難しく、好と醜は忽ち入れ替わる、と人生の流転の速さや儂さを述べた後、「盧生の夢も忽ち過ぎ、（南柯の）蟻たちは巢穴で奔走している」と、狭い世界で何も気づかず生きている虫のような存在を寓意的に風刺している。

内集8 戲答趙伯充勸莫學書及為席子澤解嘲

感君詩句喚夢覺      君の詩句に感じ 夢を喚びて覚さるれば  
邯鄲初未熟黃粱      邯鄲 初めより未だ黃粱熟せず

趙伯充（名は叔益）が黃庭堅に書道に凝るなど忠告した詩に対しての返答の詩。趙の詩にほんやりしていた自分は目覚めさせられたが、それは盧生が邯鄲で夢をみていたのと同じだ、というのが大意。

内集8 次韻徐文將至國門見寄其一

槐催舉子著花黃      槐は<sup>うなが</sup>挙子を催し 花黄を著す  
來食邯鄲道上梁      来り食う 邯鄲道上の梁

槐樹が黄色の花をつけ、受験生たちを慌ただしい気持ちにさせる。しかし彼らは邯鄲で黄粱を食べる夢（出世の夢）ばかりみている、というのが大意。後句の「梁を食う」は邯鄲夢を変形させたような表現になっている。

内集10 戲答俞清老人寒夜其二

富貴但如此 富貴は但だ此の如し

百年半曲肱 百年 半ば曲肱す

兪清老人（名は澹）は、黄庭堅の若年の頃の友人。後句に対して任淵注は邯鄲夢の典故を指摘するが、どうであろうか。「曲肱」は『論語』述而篇の顔回の記事を指す。「百年」は一般に人間の最大寿命を指すから、邯鄲夢とは無関係にもみえる。

内集19次韻徳儒新居病起

官如一夢覚 官は一夢の覚める如く

話勝十年書 話は十年の書に勝る

ここでも前句に対して任淵注は邯鄲夢の典故を指摘するが、やや強引であろう。

外集2 薛楽道自南陽来入都云々

生涯谷口耕 生涯 谷口の耕

世事邯鄲夢 世事 邯鄲の夢

生涯を谷口で農耕に明け暮れ、世間の事は邯鄲の幻と割り切る、という意。

外集7 病起次韻和稚川進叔倡酬之什

白髪生來驚客鬢 白髪 生じ来り 客を驚かす鬢

黄梁炊熟又春華 黄梁 炊熟し 又た春華

病み上がりの鬢に白髪が生じ客を驚かすほど、病気で伏せていた僅かな時間にすっかり春めいた、と述べる。「黄梁炊熟」は単に時間の短さをいうのみである。

外集9 題槐安閣

白蟻戰酣千里血 白蟻 戦い酣にして 千里の血

黄梁炊熟百年休 黄梁 炊熟し 百年休む

前句は白蟻が戦いの真っ最中で千里も血を流すほどと、人間の私利私欲の醜い争いを重ね合わせ、後句は黄梁が炊きあがる間に人生も終わる、と喝破している。

外集14 明叔知県和示過家上冢二篇輒復初韻其一

功名黄梁炊 功名は 黄梁の炊

成敗白蟻陣 成敗は 白蟻の陣

黄梁を炊く僅かな間の大手柄や白蟻たちの極小世界の勝負を、世間の盛衰と重ね合わせる。

外集16 送劉道純

麒麟圖畫偶然耳 麒麟の図画は 偶然のみ

半枕百年夢邯鄲 半枕 百年 邯鄲を夢む

麒麟閣に肖像画が掲げられる名誉は偶然の所産、邯鄲の榮達を夢みるのと同じだと言う。

外集補1 戲答公益春思其二

黄梁一炊頃 黄梁 一炊の頃

夢盡百年歴 夢は尽く 百年の歴

黄梁一炊の間に人生は終わるという哲理を述べるだけである。

外集補4 十月十五日早飯清都觀道遙堂

心遊魏闕魚千里      心は遊ぶ 魏闕 魚千里  
夢覺邯鄲黍一炊      夢は覺む 邯鄲 黍一炊

前句の「魏闕」は宮殿の門の意で、転じて榮華や富貴を指す（『莊子』讓王篇）。それを求めて魚が千里も必死になって泳ぐ姿を悠然と眺めるという意か、あるいは宮殿の門の上から魚の必死の回遊を悠然と見下ろすという意であろう。後句は邯鄲の東の間の楽しい夢から覚めたと述べる。どちらも河南葉県の寺観での清々しい気分を託している。

黄庭堅の用例も、邯鄲夢を儂い、淡い、空しい、束の間の夢とすることは他と変わらないが、そうした狭い世界で名誉や功績を争う連中たちを、突き放して見る視点が導入されていることが特徴的である。刻々と変化する流動的な世界の実相に気づかず、矮小なレベルであくせくしている人間を凝視するような、一步距離を置いた超脱の視点から眺めているのである。周知のように、黄庭堅は早くから『莊子』の熱心な信奉者で<sup>[6]</sup>、その意味では師にあたる蘇軾と共通するが、一方では黄龍派の仏教信者としても知られた。人生に対する透徹した黄庭堅の感覚を感じさせる典故が多いのが特徴である。

なお北宋後期～南宋初にかけて、主な詩人の「枕中記」を典故とした用例を原文で挙げておこう。

○蘇軾 / 孔凡礼点校・王文誥輯注『蘇軾詩集』中華書局、1982年

20今年正月十四日云々

・又向邯鄲枕中見、却來雲夢澤南州

21伯父送先人云々十四首送之其七

・一杯歸誦此、萬事邯鄲枕

43贈李兕彦威秀才

・世間萬事寄黃梁、且與先生說烏有

○陳師道 / 冒広生補箋・冒懷辛整理・任淵注『後山詩注補箋』中華書局、1995年

3八月十日其一

・一夢人間四十年、只應炊竈固依然

6次韻晁無斁春懷

・年衰鷗鷺如今是、夢斷邯鄲何處尋

7九日不出魏衍見過

・衝雨肯來尋此老、拂牀聊待熟黃梁

12和吳子副智海齋集

・客舍黃梁應未熟、且容秋蝶覺南華

『後山逸詩箋』下の「絶句」

・身將白鳥同歸日、夢到黃梁未熟時

○張耒 / 李逸安他点校『張耒集』中華書局、1996年

12謝黃師是惠碧瓷枕

・夢入瑤都碧玉城、仙翁支頤飯未成

25夜霜

・邯鄲夢裏忘將寤、蠻觸軍中尚戰雄

29許同慶示張八侍郎云々

・是非榮辱何勞問、共在邯鄲一枕中

○陳与義 / 吳書蔭・金德厚点校『陳与義集』中華書局、1982年

6元方用韻見寄次韻奉謝兼呈元東其二

・不辭彭澤腰常折、却得邯鄲夢少留

9同叔易于觀我齋分韻得自字

・但持邯鄲枕、贈我一覺睡

○楊万里 / 辛更儒箋校『楊万里集箋校』中華書局、2007年

35過彭澤泉望淵明祠堂

・夢裏邯鄲熟、談間栗里親

#### 第四章 范成大と陸游

南宋では范成大到用例が多く、やや特徴的である。以下紹介しよう。テキストは『范石湖集』香港中華書局、1974年。

7臨溪寺

少捐一炊頃          少しく捐つ 一炊の頃

暫作百年夢          暫ち作す 百年の夢

詩題の臨溪寺は徽州歙県（休寧県）の西にある。若年の徽州司戸參軍時代の作。寺でわずかな時間に気持ちのよい昼寝をしたことを言う。「一炊の頃」「百年の夢」は「枕中記」を下敷きしているものの、短い午睡を示すために使っているだけである。しかし次の用例はどうであろうか。

11玉堂寓直曉起書事記直舎老兵語

若若誇組綬          若若と組綬を誇り

紛紛夢黃梁          紛紛と黃梁を夢む

詩題の「玉堂」は宮中の建物を指す。礼部員外郎兼国史院編集官に任命され、宿直した際の作。「組綬」は印を腰につるす紐、「若若」はその紐が長く垂れるさまを言う。未明から若手の官僚たちが、誇らしげに官印を鳴らし将来の出世を夢みるかの如く出勤してくるのを、「紛紛」あれこれと「黄梁を夢む」と皮肉っている。「枕中記」の出世物語に対して斜めに構えた詩人の視点が窺われる。

12邯鄲道 自注「即昔人作黄梁夢處」

薄晚霜侵使者車          薄晚 霜は使者の車を侵し

邯鄲阪峻且徐驅          邯鄲 阪は峻き 且し徐ろに駆ける

困來也作黄梁夢          困じ来り 也た作す 黄梁の夢



不夢封侯夢石湖 封侯を夢みず 石湖を夢む

乾道六年（1170）八月下旬、金に使いした際の七絶連作の一つ。題注が「枕中記」を指すのは言うまでもない。自分も旅の疲れで思わず眠りに誘われたが、夢の中で「枕中記」の盧生のような宰相王侯への出世は望まず、隠棲の地である石湖に戻りたいものと述べる。単なる夢の代名詞ではなく、「枕中記」の内容に対して批判しながら取り込んでいる点は見落とせない。

范成大は邯鄲道に何か黄粱夢にまつわる事跡があったとは記していないが、「枕中記」はのち元の雜劇でも取り上げられ、王鐸の「辛未五月十三日再過邯（鄲）拜黄粱祠詩」（『擬山園初集』所収）から分かるように、明末（辛未は崇禎四年）には邯鄲に黄粱祠が作られ、人々の信仰を集めるまでになっていた。架空の舞台が、それを希求願望する多くの人により現実のものに化した一例である。

范成大と同時代の陸游になると、この傾向はさらに強くなる。以下、錢仲聯校注『劍南詩稿校注』上海古籍出版社、2005年新版によってみてみよう。

4 初寒

浮世看已熟 浮世 看れば已に熟せり  
不必夢邯鄲 必ずしも邯鄲を夢みず

乾道九年（1173）九月、四川嘉州での作。世の中を眺めれば、すでに夢は終わっている。邯鄲の夢を慕っても詮がない、と否定的な言い方である。

8 東郊飲村酒大醉後作

邯鄲枕中夢 邯鄲 枕中の夢  
要是念所有 要するに是れ所有を念ずればなり  
持枕與農夫 枕を持し農夫に与えなば  
亦作此夢否 亦た此の夢を作すや否や

淳熙四年（1177）九月、成都での作。「枕中記」の盧生が榮華の夢をみたのは、彼がもともと豊かな生活（所有）にあこがれていたからだ、と世俗的な欲望を暗に批判し、枕を農夫にあたえても、そんな夢をみるだろうか、と懐疑的な口ぶりである。

14 壬寅新春

尚無枕寄邯鄲夢 尚お枕の邯鄲の夢に寄する無し  
那有衣沾京洛塵 那ぞ衣の京洛の塵に沾れること有らんや

淳熙九年（1182）正月の作。出世の夢をみる枕はないから、都会の塵埃にまみれることもない、と述べる。

16 一室

此生吾自斷 此の生 吾れ自ら断ず  
不必夢邯鄲 必ずしも邯鄲を夢みず

淳熙十一年（1184）秋の作。「自斷」は自分から断念する意。杜甫「曲江三章其三」に「自斷此生休問天、杜曲幸有桑麻田」とあり、官人として仕進をあきらめたことを詠うのを踏まえる。

官界での出世の夢を断ち切ろうとしているかのようである。この時陸游は六十歳、故郷山陰で祠禄を奉じていた。繰り返し出世をあきらめるよう自分に言い聞かせていたのは、裏側からみれば、如何に胸中の鬱勃たる気持ちを抑え難かったかを示していよう。

陸游の詩人としての自覚について、かつて小川環樹博士は、四川時代の乾道八年（1172）、南鄭から劍門に入った時の「劍門道中遭微雨詩」を取りあげて、この時に詩人として生きるしかない<sup>[6]</sup>と自覚したに違いない、と述べられた。自分を招いてくれた四川宣撫使の王炎が臨安に呼び戻され、対金国の最前線から引き上げざるを得ない状況の中で、陸游が如何に落胆し官界で望みを失ったかは、想像に余りあるほどである。その四年後には放翁と号して、四川成都でかなり放恣な生活を送ったとも言われているが、官界での出世への断念は、十年以上経ってもなお陸游の内部で余熱をともなって、くすぶっていたのであろう。

#### 19思帰

碎枕不求名利夢　　枕を碎き　名利の夢を求めず  
挽河盡洗簿書塵　　河を挽き　尽く簿書の塵を洗う

淳熙十四年（1187）冬、権知嚴州（浙江建德県）の時の作。「碎枕」という強い言葉で、邯鄲夢を「名利の夢」と斬り捨てている。

#### 21儀曹直廬

惟當傾綠酒　　惟だ当に緑酒を傾けるべし  
莫待熟黄粱　　黄粱の熟すを待つこと莫れ

淳熙十六年（1189）春、臨安での作。「儀曹」は礼部の役所。礼部郎中であった陸游が、当直にあっていた時の作である。讒言に満ちた世間は人を狂わせるから、上等な酒でも飲めば十分だ、邯鄲の夢を待ち望むべきではない、という。

#### 22自笑

悪路慣曾經灩澦　　悪路　曾に灩澦を経るに慣れ  
浮世何啻夢邯鄲　　浮世　何ぞ啻だに邯鄲を夢みるのみならんや

紹熙二年（1191）夏の作。「灩澦」は長江の三峡の一つ、瞿塘峡（四川奉節県）にある巨巖で、難所として知られた。「曾」はここは「常に」の意か。灩澦堆のような危険な場所を通るのにずっと慣れてきた、人生はつかのまの栄華を夢みるだけではあるまい、と自らの来し方を振り返る。人生行路の危機の比喩として「灩澦」の語を使い「邯鄲」と並べるのは、39致仕後述懐六首其一に「灩澦　危途過ぎ、邯鄲　幻境空し」43対酒に「振り回す　灩澦の舵、喚び省す　邯鄲の枕」などとみえる。ちなみに陸游は、乾道六年（1170）四川の夔州通判として赴任した時の十月二十六日と、淳熙五年（1178）五月に成都から帰任した際にいずれもここを通過している<sup>[7]</sup>。

#### 32夢游山寺焚香煮云々

此行殊勝邯鄲客　　此の行　殊に勝る　邯鄲の客より  
數刻清閑直萬金　　數刻の清閑　あたい　万金に直す

ここでも「邯鄲客」は濁世にまみれた人を指す。しばしの気持ちよい眠りは何にも換えがたいほど貴重だと述べる。山寺の清閑な空間は、邯鄲夢とは無縁である。

45初夏野興其一

元知夢境無眞實 元より知る 夢境に眞実無しと  
不待邯鄲覺後空 待たず 邯鄲の覺めし後の空しさを

嘉泰元年（1201）夏の作。ここでも夢の世界に対し、きっぱり否定する態度がみえる。

ただし陸游も最晩年になると、「枕中記」の典故には次第に「あきらめ」や「達観」の色彩が混じってくるようにみえる。

72睡覺作其二

邯鄲夢事豈關身 邯鄲夢事 豈に身にかかわ関らんや  
未熟黄梁跡已陳 未だ黄梁の熟せざるに 跡は已に陳たり

開禧三年（1205）秋の作。邯鄲夢など自分には関係ない。黄梁が熟さぬ間に万事がすでに過去のものになってしまう、という。出世の夢など無関係であるが、時間の早さはその通りだといったかのようなようだ。

78感旧

紛紛謗譽何勞問 紛紛たる謗譽 何ぞ勞問せん  
但覺邯鄲一夢長 但だ覺ゆ 邯鄲 一夢の長きを

嘉定元年（1208）秋の作。煩わしい毀譽褒貶をわざわざ問うてみてもしょうがない、覚えるのは邯鄲の夢のようなあつという間の人生だった、という。「一夢の長き」とは、盧生の八十年の長い生涯を指しながらも、ここは現実には僅かな時間の夢であったことを言う。全体にどこか達観した趣が感じられる。

83生世

乾坤成毀由來事 乾坤の成毀は 由來の事  
生世眞同黍一炊 生世 眞に黍一炊に同じ

嘉定二年（1209）秋の作。この世の成ること成らぬことは、元より一体のもの。「成毀」の語は『莊子』齊物論篇に「成ることは敗れることと表裏の関係にあり、絶対の道からみればどちらも妄想に過ぎない」という意味で出る。世に生れても、本当に「黍一炊」の中で過ぎてしまうものだ、と我が身を振り返っている。

最晩年を除けば、陸游が「枕中記」の主題や思想に否定的、拒絶的であるのは、おそらく彼の生涯を貫いた安定した精神状態と無縁ではあるまい。大家族の家長として子や孫の教育に奮闘し、家計や食事や健康管理に気をつかい、近隣の農村をくまなく歩き回り村人たちと言葉を交わし、彼らとのつきあいを心から楽しんでいる様子は、しっかりと大地に根を下ろした生き方を強く感じさせるものがある。陸游が仏教や老莊思想に無関心であったとはいわない。それらに関して一般の士大夫なみの知識はもっていたに違いないが、日々の生活を丁寧生きることを旨とした陸游にとって、夢でもって現実を慰めたり、夢の世界に逃避したりするつもりはなく、夢はしょせん一場の幻境という意味しか持たなかったのではあるまいか。

#### 第四章 劉克莊

最後に南宋後期の大家、劉克莊をみてみよう。テキストは辛更儒校注『劉克莊集箋校』中華書局、2011年。

10鼓山用餘干趙相韻

試問炊梁成短夢 試みに問う 梁を炊ぎ短夢を成すは  
何如煨芋撥殘灰 芋を煨<sup>や</sup>き殘灰を撥<sup>いづれ</sup>するに何如ぞ

福州閩県の鼓山にある趙汝愚（南宋前期の宰相）の石刻に和した詩である。出世にあくせくする人生など、芋を埋め火で焼いた残りの灰をひっかき回すのと変わらない、と述べる。「芋を煨き云々」は何か典故があるかも知れないが、無価値なことを指すのであろう。

16十一月二日至紫極宮云々

山中採芝去 山中に 芝を採りに去き  
舍下炊梁熟 舍下に 梁を炊いで熟さん

江西潯陽の紫極宮を訪ねた際の作。そこに残された李白・蘇軾・黄庭堅の詩を詠み、彼らがいずれも流謫の運命に翻弄されたことを偲んで、最後に山中に隠れ仙芝を採り、部屋で淡い夢でも見た方がいい、と締めくくっている。

18題四夢図・黄梁

偶然眠一覺 偶然 眠りより一たび覚め  
推枕起來驚 枕を推し 起き来りて驚く  
寂莫猶前日 寂莫 猶お前日のごとし  
榮華已隔生 榮華は已に隔生たり

四夢とは「夢蝶」「夢筆」「黄梁」「南柯」。「夢筆」は六朝の江淹が、夢で五色の筆の返却を求められ、それ以後は詩文が書けなくなってしまった故事を指す。この詩は「枕中記」に対する感想を記すが、夢の榮華も目覚めればむなしいことを述べただけである。

46夢覚

抛書哈臺聲裏 書を抛<sup>な</sup>げるや 哈台の声の裏  
轉枕屈伸肘中 枕を転じるや 屈伸の肘の中  
盧生相黄梁舍 盧生は相となる 黄梁の舍  
沈郎壻翠微宮 沈郎は壻となる 翠微の宮

七絶の前半は、書物を放り出すや、たちまち哈臺（いびき）の音を立てる。枕をどかすや、すぐ伸びをして目覚めることを言う。結句は沈亜之「秦夢記」（『太平広記』巻282）により、沈が白昼夢で古代にタイムスリップし、秦の穆公に仕え、公女の弄玉の壻となる話を下敷きにする。作中で二人が住んだ宮殿が「翠微宮」であった。ここでは「枕中記」の盧生が宰相になり、「秦夢記」の沈亜之が公女の壻になる、いずれも楽しい夢として描かれており、夢の中での変身を楽しむ雰囲気を感じられる。

なお 劉克莊の用例にすべて説明をつけるのは煩瑣なので、以下列挙しておく。

19居厚弟示和詩復課其七

有黄梁枕休云夢 黄梁の枕の 云夢に休む有り  
 無紫金丹可駐顔 紫金の丹の 顔を駐<sup>とど</sup>むる可くも無し  
 23不寐其一  
 轉枕易如炊斗黍 枕を転じるの易きは 斗黍を炊ぐが如し  
 據梧聽徹奏■■ 梧に據り ■■を奏するを聴徹す ※■は欠字

33問訊竹溪其二

推黄梁枕了無夢 黄梁の枕を推すも 了として夢無く  
 對紫薇花他人有人 紫薇の花に対し 他に人有り

38不寢其二

誰與南柯太守説 誰か南柯太守と与に説かん  
 黄梁未だ熟且追歡 黄梁未だ熟せざるも 且し追歡せん

38答黄徳遠

痴人多戀黄梁夢 痴人は多く恋<sup>した</sup>う 黄梁の夢を  
 不信先生夢也無 信ぜざる先生に 夢も也<sup>ま</sup>た無し

42夢回

跳出槐安有底忙 槐安を跳び出で 底<sup>なん</sup>の忙なること有らん  
 何須更待熟黄梁 何ぞ須んや 更に黄梁の熟すを待つを  
 ※後句は前掲の王安石「懷鍾山詩」とまったく同じ。

30老歎

功名幻妄炊梁枕 功名の幻妄たること 梁を炊ぐ枕のごとく  
 歲月奔忙下坂輪 歲月の奔忙すること 坂を下る輪のごとし

最後に付け加えれば、劉克莊に特徴的なのは、挽歌に「枕中記」を踏まえた典故を用いていることである。

8挽傅諫議其二

勸破邯鄲夢 勸破す 邯鄲の夢  
 抽回洛社身 抽回す 洛社の身

傅諫議は傅伯成。邯鄲夢のような出世を望むことなく、また洛陽など都会の豪華な生活からも身を引いていた、と傅氏の人柄の清廉さを称えている。

33挽長樂王明府

人間夢事一炊熟 人間 夢事 一炊の熟  
 宰上埋辭萬丈光 宰上 埋辭 万丈の光

王明府とは福建の長樂県知事であった王澡（字身甫）。短い人生を終えたが、墓上に捧げられた墓誌銘は後世まで光を放っている、というのが大意。埋辭（墓誌銘）とは権兵部尚書の葉夢鼎の書いたそれを指す。

39又五言

不記邯鄲夢            記さず 邯鄲の夢を  
猶貪洛社遊            猶お貪る 洛社の遊を

詩題にいう「又」とは「挽卓元夫国博詩」の続きを指す。邯鄲の夢は思い出せないが、もう一度一緒に都で遊びたい、という意味か。

ちなみに劉克莊は、挽歌に関して「南柯太守伝」も典故として使っている。

21惠州弟哀詩其一

用北辰阡殊不亂        北辰の阡<sup>みち</sup>を用て 殊に乱れず  
似南柯夢復疑非        南柯の夢に似て 復た非かと疑う

惠州弟とは 劉克莊の三弟の劉克剛を指す。宝祐二年（1254）、惠州知事で亡くなった。弟の埋葬の地の北辰山の墓道は整えられ、南柯夢のようで亡くなったのが現実とは思えない、と悲嘆している。

なお南柯夢を死者を悔やみ偲ぶ場合に使う例は、早く黄庭堅にみえる。内集17「湖口人李正臣蕃異石九峰云々」に「能く趙璧を廻す 人は安くにか在る、已に南柯に入り 夢は通ぜず」と、蘇軾が亡くなったことを、南柯夢中に入ったと表現している。

24挽南雄林使君

東路歸何及            東路に帰らば 何<sup>いづく</sup>にか及ばん  
南柯夢忽醒            南柯の夢は 忽ち醒めたり

林使君とは南雄州知事の林鏄を指す。林が鬼籍に入り、もはや会うことは叶わず、南柯夢は終わったと述べる。南柯夢の言葉には生前の楽しかった交遊の意が含まれている。

これらの詩では、邯鄲夢にせよ南柯夢にせよ、いい意味で生前の人生を肯定的に評価している。別言すれば、相手の現実の人生を、夢の中の栄耀栄華の仮構の世界に引き寄せて、好意的に評価しているのである。

おわりに

宋詩の歴史の中で、唐代伝奇小説「枕中記」がどのように典故として受容されてきたかを、駆け足で展望してみた。そこには詩人の個性が絡んでいて、この邯鄲夢の故事が様々な使われ方をしながら、北宋から南宋にかけて次第に浸透し定着していく様子が窺われよう。

むろん宋代の詩人たちがどの程度きちんと「枕中記」を読んでいたのか、正確には分からない。作詩の上での単なる常套的な典故の一つと見なしていただけかも知れないが、その使い方が次第に広がり深まっていることは間違いなく、そこには詩以外のジャンル（詞、画、演劇など）に於ける「枕中記」の受容とおそらく密接な関連があるかも知れない。今後の課題である。

## 注

- 1 李之亮校点『王荊公詩注補箋』や四部叢刊本『臨川先生文集』などほとんどのテキストは「且飲且田獵」に作るが、「且」字には疑問がないわけではない。『莊子』齊物論篇は「夢飲酒者、且而哭泣。夢哭泣者、且而田獵」であり、この「且」字を字形の酷似した「且」字に誤記した可能性もあるが、ここでは指摘にとどめておく。
- 2 清水茂注『中国詩人選集二集 王安石』岩波書店、1962年。
- 3 『甌北詩話』巻11。
- 4 『江西詩派研究』p54、齊魯書社、1986年。
- 5 黄庭堅の「莊子内篇論」は『莊子』内篇を解説したもの。また自身の詩文を編纂するに当たり『莊子』になり内篇と外篇に分ける構想を持っていたといわれる。
- 6 小川環樹「詩人の自覚—陸游の場合—」、初出は笈文生注『中国詩人選集二集 梅堯臣』第三巻の付録、岩波書店、1962年。のち同氏『風と雲—中国文学論集—』朝日新聞社、1972年に再録。
- 7 范成大の「呉船録」巻下の淳熙四年（1177）七月十九日の条にも関連の記述がある。

（平成24年9月30日脱稿）

※本稿は、平成24年度の科学研究費補助金（基盤研究（C））「宋詩に於ける唐代伝奇の文学的思想的影響の解明」（課題番号22520364）の成果の一部である。